

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## 代中の几种“”字研究

メタデータ	言語: zho 出版者: 公開日: 2017-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2287">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2287</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 博士論文審査の要旨

“给”是汉语中意义和功能较为复杂的常用成分之一。虽然汉语语法学界对“给”已经给予较多的关注，并已取得丰硕的研究成果，但对“给”的意义和功能演化的路径和理据、“给”在某些句法结构中的表意功能甚至语法性质和地位，还未能做出非常合理的解释，也未能形成较为一致的认识。该文在先行研究的基础上，对“给”的语法化轨迹进行描述，对某些结构中语法化程度相对较高的“给”的意义和功能进行分析，这无论是从理论研究还是从汉语教学的角度来说，都是很有意义的。

论文共分五章：

第一章《绪论》，主要包括研究对象、研究目的明确及已有研究综述等几项内容。该文主要以几种具有一定的主观化色彩的含“给”句式为研究对象，如以“给”为句式标记词的“处置”式、“被动”式以及“给”直接和谓词性成分组合的“给VP”结构。在“已有研究综述”部分，评介研究者对“给”的基本义——“给予”义的形成与发展、“给”的语法化、现代汉语中的“给”的用法等方面的问题所进行的研究及取得的研究成果。

第二章《用作处置式标记的“给”》，首先从历时的角度分析“给”演化为处置式标记的路径和动因；然后以定量和定性相结合的方法考察现代汉语中“给”字处置句施受成分的语义性质，并将其与“把”字处置句进行对比，分析二者在表意特征和语用功能方面所存在的区别。

第三章《用作被动式标记的“给”》，首先通过历时语料及留学生汉语习得、儿童语言发展中的“给”的使用情况的考察，说明“给予”义与“容许”义（广义的“致使”）的关联；其次通过从“主动容许”到“被动容许”的语义演化轨迹的描述，阐释给予者向受损者转化的理据以及“给”用以引介受损者的“给”字句与被动式在结构和语义上所体现出的平行性。同时，还基于“给VP”结构所述事态的“非预期”和“已然性”特点，指明“给”进一步向表被动式标记发展的动因；最后通过比较共时层面上“给”与“被”在使用倾向上的差异，阐释“给”字被动句的使用一般需要满足的语义条件。

第四章《“给VP”结构的形成和使用》，首先讨论“给VP”结构的形成过程和语义、功能特点；然后讨论“给”与某些人称代词构成的一类语法化和主观化程度较高的“给P”结构（如“给你”），指明这是一类具有话语标记特征的固定结构。

第五章《结语》，主要包括两项内容：一是概述全文内容，总结研究成果；二是指明本研究所存在的不足，指出值得进一步研究的问题，明确今后的研究方向。

“给”是汉语中一个语义、用法及其演化路径都比较复杂的常用词，围绕着“给”及其所在句式，尚有很多问题没有得到很好地解决，因而还有进一步探讨的必要。该文从大

量的历时与共时语料出发,运用语法化理论、主观化理论及构式语法理论等理论学说,对“给”的演化路径和理据加以描述与阐释,对“给”在相关句式中的表意功能及其形成机制进行说明与分析,所讨论的问题多为学界尚存争议或尚未述及的问题,应当说,这样的选题是很有意义的,同时也颇具难度的。从总体上看,该文结构完整、合理,内容充实、具体,语料丰富、多样,对先行研究的评介比较全面、准确,对相关理论学说的运用大体恰当,对问题的分析较为深入,分析结论有新意,也有一定的学术价值。特别值得肯定的是,该文能够从语言事实出发研究问题,语料工作做得比较扎实,文中所提及的一些语言现象可以促使人们进一步思考问题,有助于推进相关研究的发展与深化。兼顾历时与共时、描写与解释,并能将二者有机地结合起来,也是该文很重要的一个特点。

从口头答辩可以看出,作者已对问题进行了比较充分的研究,并已具备良好的专业知识结构和专业研究素养,应有较好的专业发展前景。

当然,该论文也还存在一些不足之处,现将修改意见概述如下:文章涉及很多历时层面的语料,或者说历时层面的研究是文章很重要的内容,因此现用标题似已无法非常全面、准确地反映文章内容;在使用历时语料时,要特别注意引用文献的版本及成书时间等问题。另外,还可适当扩大北京话文献的检索范围;文章对个别问题的分析还不够清楚,分析结论缺乏足够的说服力,有时会给人一种循环论证的感觉;有些语言现象(如介词宾语的脱落)是具有语言类型特征的现象,希望作者能从语言类型学的视角说明问题。(关于需要修正或补充的具体内容已向作者指出,在此不再一一述及。)

鉴于论文及口头答辩的总体状况,并考虑作者的综合情况,审查委员一致同意该论文通过审查,并建议授予作者博士学位。

## 李夢迪氏博士論文の審査結果

“給”は中国語において、意味・機能の比較的複雑な常用形式の一つである。中国語文法界の“給”に対する多くの関心にも関わらず、また既に豊富な研究成果が蓄積されているとはいえ、“給”の意味・機能の発展過程とその論拠や、“給”が特定の文法構造において果たす意味・機能や文法的性質、及び体系的な位置づけについては、合理的な解釈が行われておらず、一致した認識に至っているとは言い難い。本論文は先行研究の基礎の上に、“給”の文法化の経路を記述し、特定の構造において用いられる、文法化の度合いが比較的高い“給”の意味・機能を分析している。この試みは理論研究と中国語教育のいずれの面においても有意義なものである。

本論文は5つの章によって構成されている。

第一章は序論である。ここでは主として、研究対象と研究の目的を明確にし、先行研究が概観される。本論文は、主として一定の主観化の作用の含まれる“給”構文を研究対象とする。例えば、“給”を構文標識とする「処置文」や「被動文」、及び“給”が直接動詞句に結合する“給 VP”構造等である。「先行研究概況」の節では、従来の研究における“給”の基本的意味——「授与」の意味の形成と発展、“給”の文法化、現代中国語における“給”の用法などに関する研究とその成果が概観される。

第二章は、「処置文」の標識としての“給”に関する議論である。まずは通時的な角度から“給”が「処置文」の標識に発展する経路とその動機付けが分析される。そして例文の量的な分析と質的な分析を総合的に組み合わせる方法によって、現代中国語における“給”標識の「処置文」における動作者と受動者の意味的特徴について考察し、これを“把”標識の「処置文」と対照することにより、両者には意味的特徴と語用論的機能の両面において相違点があることを明らかにしている。

第三章は、被動文の標識としての“給”に関する議論である。まずは通時的な言語資料及び留学生の中国語習得、そして子供の言語習得過程における“給”の使用状況を考察することにより、「授与」の意味と「許容」(広義の「使役」)の意味の関連性について説明する。次に、「主体的許容」から「受動的許容」への意味の変遷を辿ることによって、受領者が受損者へと転化する理由、及び“給”が受損者を導く“給”構文と被動文の間に、構造と意味の両面において平行性が見られることを明らかにしている。同時に、“給 VP”の述べる事態の「非予期」と「已然性」の特徴に基づいて、“給”が更に一步被動文の標識として発展する論拠を示す。そして最後に共時的なレベルにおける“給”と“被”の使用上の差異を比較することによって、“給”を用いた被動文が満た

さなければならぬ意味的な条件について解釈を加えている。

第四章では、“給 VP”構造の形成と用法に関する議論が展開される。まずは、“給 VP”構造の形成過程と意味、機能的特徴が検討される。そして“給”が特定の人称代名詞と共に、文法化と主観化の程度が比較的高い“給 P”構造を形成し(例えば“给你”), これがある種の談話標識の機能を備えた固定した構造であることを指摘している。

第五章は「結論」であり、主として二つの内容を含んでいる。一つは、論文全体の内容を概観する内容であり、研究成果全体の総括となっている。いま一つは、本研究において不足している部分を指摘し、さらに踏み込んで研究していく価値のある問題を挙げて、今後の研究の方向性を明確にしている。

“給”は中国語における意味や用法、発展過程が比較的複雑な常用語であり、“給”やそれを用いる構文をめぐって、なお多くの問題が十全に解決されておらず、さらなる検討の必要がある。本論文は大量の通時的及び共時的な言語データの観察から出発し、文法化や主観化、及び構文文法理論などの学説を運用し、“給”の発展過程とその論拠について記述と解釈を与え、“給”の関連する構文における表現機能、及びその形成の様相を説明・分析している。ここで議論される問題は、その多くが学界においてなお論争が継続しているか、或いは、未だ言及されていない問題であり、このようなテーマ選定自体が非常に有意義であり、同時に高難度のものであったと言えるだろう。総合的に見て、本論文は構成が合理的に整理されており、内容も具体的で充実している。また、言語データも豊富かつ多様であり、先行研究に対する把握も全面的で概ね精確である。関連する理論や学説の運用も適切であり、問題に対する分析は奥行きがあり、分析の結論には創意があって、一定の学術的価値が認められる。特に指摘しておくべき点は、本論文が言語事実から問題に対する探求を出発させ、例文を分析する作業が丁寧であり、文中に言及された幾つかの言語現象には啓発的なものが含まれており、関連する研究の発展と深化を推進させるものとなっていることである。通時的アプローチと共時的アプローチの双方から記述と解釈に努め、両者を有機的に組み合わせた点も、本論文の重要な特徴の一つである。

口頭試問の具体的な内容から、論文提出者は自身の研究テーマに対して十分な吟味を行い、既に良好な専門的知識と研究の素養を備えていることが伺え、研究の今後の進展が期待される。

当然のことながら、本論文には幾つかの不足したところが存在する。現段階で挙げられる修正意見は以下のようなものである。本論文は多くの通時的な言語データに言及し

ており、また、通時的なアプローチが本論文の重要な内容となっている。したがって今回の論文題目は論文の内容を全面的かつ正確に反映するものとなっていない。通時的なデータを使用する際には、特に引用する作品の版本や、成書時期に関するデリケートな取り扱いが求められる。また、近年研究に大きな進展のあった北京語を反映した文献資料にも観察の範囲を広げるべきであった。本論文は個別の問題に関する分析に論証の不十分な箇所があり、循環論に陥っている印象を与え、結論に十分な説得力が欠けているところがあった。前置詞の目的語が省略されるなどの、いくつかの言語現象には、類型論的な観点から考察を加える必要があった。

口頭試問の全体的状況を鑑み、論文提出者の回答の内容等を総合的に勘案した結果、審査に当たった委員は一致して本論文が審査を通過するに値するものであることに同意し、本論文が博士の学位の授与に値するものであることが認められた。